

&lt;翻 訳&gt;

## トーマス・ムルナー：阿呆祓い (6)

名古屋初期新高ドイツ語研究会訳

(代表 精園修三)

ここに翻訳したのは1512年に刊行されたThomas Murner: Die Narrenbeschwörungの第32章から第39章までである(第31章までは『中京大学教養論叢』第38巻第4号, 第39巻第2号, 第4号, 第40巻第2号, 第4号に所載)。使用テキストはFranz Schultz編集のムルナー全集Thomas Murners Deutsche Schriften mit dem Holzschnitten der Erstdruckeの第2巻(M. Spanier編, Walter de Gruyter 1926年刊)を使用し, 適宜Josef Kürschner編集のDeutsche National-Litteratur Historisch-kritische Ausgabe第17巻第1分冊(G. Balke編, 三修社版1973年)を参照した。また戦前のレクラム版でこのテキストの現代語訳(Universal-Bibliothek 2041-2043, Die Narrenbeschwörung von Thomas Murner. Erneut und erläutert von Karl Pannier. 1884 Leipzig)を参考にした。聖書に関しては『聖書新共同訳』(日本聖書協会1987年版)に拠った。

この翻訳は, 名古屋初期新高ドイツ語研究会が1994年6月から輪読会のテキストとして使用し, 各章をメンバーが分担して訳していたものを, 今回再度共同で検討修正したものである。但し, 解釈の一致をみない箇所についてはその章の担当者に最終判断を任せた。1999年12月現在のメンバーはつぎのとおりである。青木一行(名城大), 丑田弘忍(中京大), 工藤康弘(三重大), 精園修三(中京大), 橋本忠欣(福井大), 松尾誠之(愛知県立大), 森昌弘(名大名誉教授), 山田やす子(皇学館大)(以上ア

イウエオ順)。

訳分担表

第三十二章 精園

第三十三章 精園

第三十四章 橋本

第三十五章 森

第三十六章 山田

第三十七章 青木

第三十八章 松尾

第三十九章 工藤

第三十二章<sup>(1)</sup> でたらめな説教をすること<sup>(2)</sup>

貧しい人々に、絶対あり得ない  
でたらめを言い、  
貧しい人々を嘘で苦しめる人は、  
神の意に反する説教をしていることになる。

この世の領主はなかなか学があるので、  
領民に租税や  
賦役を課そうとするとき、  
次のような説教を始める。

- 5 「お前たちを手ごわい敵が、  
質の悪い、全くやくざな者共が、狙っている、  
また奴らにはお偉方の後ろ楯があり、  
太刀打ちできない、  
そこで心休まる時とてなく、
- 10       もしかしたら妻子を見捨てる羽目になるかもしれない。  
だからより良い策は、  
各人が税を出し合って、  
俺たちに千グルデン払い、  
一緒に仲良く暮らすことだ。」
- 15 こうした嘘がしばしばつかれる。  
だがよくよく調べてみれば、  
それは真っ赤な嘘で、  
貧しい人々を欺いたのだ。  
世の人は今訳のわからぬ税金を沢山ふんだくられる、
- 20       それというのも勇敢に戦って、  
トルコ人をビザンチンから撃退し、  
ダットン人を追い払うためだという。

そんなことがすべての土地で説教される。

そんなのはでたらめだ。

25 もしも本当にトルコ人を追い払いたいのなら、

まず領主たちと一戦交えねばならぬ。

確かに連中はトルコ人と、

至るところで幾多の戦を、

戦うつもりだと言っている。

30 ところが連中は娼婦と一戦交え、

ワインを傍らに鎧をまとい、

ワインをがぶ飲みしている。

このように領主たちは貧しい人々を苦しめ、

でたらめな説教をしてきた。

35 我々は何度も騙されて、

お金を取られているので、

私はドイツ人というものが

本当に不思議で仕方がない。

ドイツ人は賢くなろうとしても、

40 策略でやられてしまうのだ。

もっともドイツ人が賢いのなら、

私がお祓いする必要もないわけだ。——

聖職者がお金をふんだくろうとするとき

でたらめな口実を見だし、

45 いい加減なこと、

馬鹿馬鹿しいことを説教する。

司教は徴税係のところへ人をやり、

お金がとても足りぬと、

苦しみ、悩みを訴えて、

50 徴税係を説き伏せて、お金を騙し取る。

徴税係は即座に言う。「司教様、

お任せください、心配ご無用です。

村の司祭どもは皆

贅沢な暮らしをしています。

55 どいつもこいつも女をはべらせ、

日夜同衾しています。

だから私に次のような指令書をください、

女と縁を切らない奴には、

私が罰金でも、体罰でも課すことができる、

60 それにその女も追放できるという指令書を。

誰一人女と縁を切らないことは、

私にはよく分かっています。

そこで私は奴らにあまねく課税して、

めいめいが家に持っているものに応じて、

65 或る者にはお金で、或る者には牛で払ってもらいます。

私はこの件を立派に処理することができます。

料理は私にまかせ、あなたは食べるのです。

間違いなく、お金を作りだしてみせます。

おつむの弱い方には理解できないでしょうが、

70 私の知ってるおおかたの司祭からは、

千グルデン、銀のスプーン、

金の指輪が引き出せます。

連中は例の指令書を目にするやいなや、

私に懇願するのです。

75 『考えてもみてください、お情け深い徴税係様、

どうして私が子供を皆、

それにその母親も追い出すことができましょう。

そんな苦しみにはとても耐えられません。

二十グルデン差し上げますので、

80 一緒にしておいてください。』

怒った顔をして私は奴に答える。

『そういうことは司教様のお考えに背くし、

金が目的でもない。

司教様が指令書をお出しになったのは、  
85 ただひとえに魂の救済を願っておられるからだ。

私だって指令書を売りにきたのではない。  
しかしお前が三十グルデン出すならば、  
司教様のお情けにすがって、  
これまで通り、

90 皆一緒にしておいてやろう。』

そのお金さえ手に入れば、各人が  
どこでその罪を贖おうと、私の知ったことではありません。」  
お偉方の皆さん、私はしかとご注意申し上げる、  
もし何か改善案なり、

95 命令書、指令書のたぐいが届いたら、  
司教とその手下が、  
お金に困っていると知れ、  
そうすれば事態がよくのみこめる。

#### 注

- (1) この章は、つまらぬ口実で不当な要求をする人、特に高位聖職者のゆすりに対する批判である。
- (2) 原文は von blauen Enten predigen 「青い鴨について説教すること」である。「青い鴨」とは「嘘」「根拠のない話」の意である。

### 第三十三章<sup>(1)</sup> 身ぐるみ剥ぐこと<sup>(2)</sup>

まっとうな老人たちの時代には、  
羊の毛を刈ったものだが、  
いやはや、今の若い者の中には  
子羊の皮まで剥ぐ奴がいる。

昨今はあらゆるものに重税がかけられている、

同様に哀れな百姓にも高額な税が課せられ、  
今やもう暮らしていけないほどだ。

百姓は事前に身ぐるみ剥がねばならず、  
5 田畑を耕してなどいられない。

地代と税金だけでは不十分で、  
百姓は自分のものすべてに税を払わねばならぬ、  
困ったことにライン河は関税だらけだ<sup>(3)</sup>。

そんなもの河に沈んでなくなればいいのに。

10 ある家来が奉公すると、  
領主はその家来に報酬として

町なり村なりをくださる。

すると、もうそこは誰も素通りできない、  
極めて些細なものにも関税がかかってきて、

15 法外なお金を取られる。

家来にお金が払えない領主は、  
家来を解雇すべきだ、

そうすれば誰も困らなくていい。

地代と租税、それに家屋税までも

20 お上は考え出した、  
消費税、もういい加減にして欲しいが、

渡橋税とその他もろもろの税。

町の見張り、家畜の番、無料奉仕、賦役等の仕事で

困ったことに未亡人や孤児ができる。

25 死ねば死んだで相続税がとりたてられる。

ニュルンベルクでは何で支払うか選択の余地があったのに<sup>(4)</sup>、  
当地では相続税を支払う前に

百姓がくたばってしまう。

貧しい百姓から財産を奪い取るやり方は

30 まるでかささぎのそれだ。

百姓はとにかく財布のなかに手を入れ、

- 不可能を可能にせねばならない。  
鶏が卵を一個生めば、  
百姓に知らされるのは次のようなお達しだ、  
35 わしには黄身を差し出せ、  
白身は女房がいただく、  
百姓は卵の殻を食べておけ、というお達しが。  
そうでなくとも聞いたことがある、  
百姓の手に入るのはわらしべぐらいのものだと。  
40 それから奴らは飲酒税を取り立てるが、  
百姓がそんなものを沢山もっているわけがない。  
その悪知恵も最近考えだされたもので、  
法典には書かれていないだろう。  
百姓は家のなかには悪貨も良貨ももたず、  
45 外の畑にはたいした穀物もない。  
お前が取り立てるのは確かに悪貨だが、  
受け取れば良貨になる。  
たとえ私がちょっと一杯やれと言われても、  
その半分はもう税として差し引かれている。  
50 実った穀物を計量しても、  
その三分の一はなくなっている。  
すべてのものに過重な税がかけられ、  
百姓たちがあまねく嘆いているのもそのことだ。  
司祭は年貢で食っていけないので、  
55 十分の一税<sup>(5)</sup>を手に入れようとする。  
ところがいま地方によっては  
十分の一税は世俗の徴税係の管理下にある。  
徴税係が頭を中剃りすると、  
司祭となる。  
60 徴税係は自分の余祿が出るように、  
とにかく百姓から搾り取ろうとする。



- 納銭や告解料を支払うこと、  
その上更に司祭を養うこと、  
洗礼謝礼金を義務づけられて、
- 65 百姓はお金を教団に差し出す。  
するとその男の名前は記帳され、  
そのため男は一フーダー<sup>(6)</sup>のワインを差し出す、  
そこで男のために毎日ミサがとりおこなわれるが、  
そう、男の名前が思い出されるのはミサをあげるときだけだ。
- 70 男はお布施、七日目、八日目、三十日目のお布施を差し出し、  
各回忌の法要もやってもらおうとする。  
その後百姓は寄進もせねばならない、  
それには四季それぞれのお祭りのお供が必要だ。  
それから修道士も袋をもってやって来る、
- 75 そこで百姓は出せるものを差し出す。  
小麦、大麦、チーズに玉葱を  
出さないと、嫌な顔をされる。  
続いて、寺院の建立が求められる。  
すると聖アントニウス<sup>(7)</sup>は豚を欲しがり、
- 80 聖ヴァレンタイン<sup>(8)</sup>、ほかの乞食坊主、  
物貰いに浮浪者に放浪者もやって来る。  
女乞食が豎琴をかきならし、  
放浪学生が金を集める。  
その上、落雷、降雹、降雪の災難が
- 85 百姓たちを苦しめる。  
兵隊も分け前に預かろうとする。  
どいつもこいつも百姓から奪い、  
身ぐるみ剥ごうとするのだから、  
哀れな百姓はたまったものではない。
- 90 百姓からものを取るにも程々にしておけば、  
前年、そしてその前の年よりももっと多くのものが取れるの

だが。

百姓が辛抱強く耐え、

その辛抱にほうびを求めても、

神様は駄目だとはおっしゃらないだろう。

95 ああ、親愛なる百姓よ、お前については

たいそうな話が作られているがその通りだ。

身を屈めるか、逃げるかしてやり過ごせ、

天気はしょせんいつかは変わるのだ。

#### 注

- (1) この章は農民搾取に対する批判である。
- (2) 原文は die schaff schinden で、「羊の皮を剥ぐこと」である。諺「羊の毛を刈るのはいいが、皮まで剥いではならない」から、表題の意となる。
- (3) 昔、ライン河を航行する船舶は、兩岸に城を構える各領主に通行税を払わねばならなかった。
- (4) ニュルンベルクの遺産相続法は、シュトラースブルクやフランクフルトほど厳しくなかったとされる。
- (5) 教会の維持、運営のため、収穫の十分の一を納める税。
- (6) 当初、馬車一台分の積載量。その後、容量の単位になるも、内容は時代と場所によって異なる。
- (7) 『聖アントニウスの誘惑』としてよく絵画の題材になる聖アントニウスは、家畜、とくに養豚の守護聖人でもあった。
- (8) てんかんの守護聖人。アングロ・サクソン系のあいだでは、『聖ヴァレンタインデー』（2月14日）に贈物を交わす習慣があるが、ドイツでは「不幸の日」とされる。

### 第三十四章<sup>(1)</sup> 虱たちに竹馬を作ってやること

私たち哀れな虱は、

シャツの襟に格子模様や梯子模様を

縫いつけられたことで、

一匹も襟の上に登れないのを嘆かざるを得ない。

虱たちは、皇帝や王様から得た  
特権を携えている。

虱たちは、体や胸元で  
暑過ぎるなら、

5 皇帝の権力をかざして、  
襷をすり抜けて

襟へ登り、その上で、  
暑さで息が詰まることなど決してない。

どの虱も永く隠くれていたためしはなく、

10 毎日特権を行使して、

這い出してきたは、上に座っている。

だが今では虱は上に登らせてはもらえず、  
皇帝からもらった権利は

律儀な虱から取りあげている。

15 今では首にしっかりものが巻き付けられ、

あらゆる虱対策が編み出されている。

今では女たちはみな綺麗で、

首にはぴかぴか、きらきら光る

宝石を掛けている。

20 その上で飛び跳ねる虱などいはしない。

この輝きで虱たちはみな追い払われ、

下にいるしかない。

ある女たちは真珠を掛けていて、

その力にはどの虱も敵わず、

25 またまた逃げ込まねばならない。

日頃虱をたくさんわかせている

どの金持でも、このことには気をつけろ。

木のへらで連中から虱をこすり取ってやらなければならない  
ぞ。

連中が真珠を下げているのは、

- 30           どんな虱も這い上がれないようにするためだ。  
数人のかの愚かな連中はこれに習って、  
          金貨を巻きつけ、  
加えて幾つかの珍しい硬貨を掛けていたりする。  
          金貨や金の指輪、
- 35           こいつは阿呆がしなければならない出費だ。  
          虱を防ぐために  
人々がこんなに大変な費用を使っているのは、  
          嘆かわしいことではないか。  
虱がつかないように、
- 40           こうしているのはよく分かる。  
金は本質からして冷たく、  
          暖かさに慣れた  
哀れな虱にはいやなもだ。  
          他の連中は、ハンガリーの犬のように、
- 45           首輪を造り、  
錠前でしっかりと締めている。  
          まるで聖レオンハルト<sup>(2)</sup>の前に立っているかのように、  
連中が首を縛っているのには、  
          笑いがとまらなかったものだ。
- 50           虱の弱点が何かよく分かる、  
          首が縛ってあれば、  
また下に潜り込まざるを得ないわけだ。  
          まだ他により紐を  
シャツにつけている連中がいる。
- 55           これには虱たちが公然と苦情を述べている。  
虱たちはより紐がどういう意味なのか分からず、  
          またまた肌にいつづけ、  
上へ登らせてくれるものかどうか、  
          あれこれ頭をひねり迷っている。

- 60 ヘブライ語, グリシャ語, ラテン語が  
書いてあるシャツから,  
虱は昔追い払われたので,  
もう決して入り込めない。  
こんな言葉が襟元についていれば大変有効で,
- 65 虱はこいつをみな怖がるものだ。  
哀れな虱を一匹くらいは襟から  
追い出さないでおけないのか,  
こんな言葉やお被いは  
多くのしたたかな悪魔を防いでくれるものだ。
- 70 二三の者は襟元に, 炎のようなギザギザの縁飾りを作り  
——亜麻布とビロードを組み合わせて——  
虱をみな一緒に火炙りにし,  
首筋から追い出すために,  
十字架もつける,
- 75 普通の十字架, ブルグンド風の十字架<sup>(3)</sup>, そして可能な限り。  
虱が聖なる十字架を見ると  
斜め後ろに退き下がり,  
再び胸元に潜り込んでしまう。  
悪魔だって十字架を避けなければならないものだ。
- 80 どうして哀れな虱は逃げ出せず,  
シャツから出ずにおれようか。  
それにまだまだ格子模様もあり,  
オートミールのように黄色いペールがある。  
梯子模様もいろいろで,
- 85 こいつをドイツ式がらくたといい,  
どんな虱も登れやしない。  
それには黒い紐が掛かっており,  
哀れな虱たちには今や苦しみの種だ。  
虱の嫌いな者は

- 90 黒い紐をかけ、黒い上着を羽織っている。  
もし虱たちがその黒いものを登ろうとすると、  
もう隠れていることはできない、  
白い虱は目立ち、  
簡単に見つけられてしまう。
- 95 さあ言ってくれ、お願いだ。  
こんなに大枚使いながら、  
虱たちを胸元にへばりつかせているとは、  
連中は大馬鹿者でないかどうか、  
金銀、宝石、
- 100 真珠にネックレス、大小取り混ぜて、  
鎖、硬貨、より紐、  
梯子模様、格子模様と沢山、  
十字架、火炎模様、金貨が襟元に編み込まれているくせに、  
その下には虱を養っている。
- 105 虱から特権を取り上げて、  
衣服の中に押し込めようとしているのだ。  
旧約聖書によれば  
以前虱は上に上っていたのだ<sup>(4)</sup>。  
それで私はよくよく考え、
- 110 虱に竹馬を作ってやった。  
虱たちが梯子模様やネックレスを  
皆一緒に越えて、  
また再び上に登れて、  
特権が奪われないようにだ。
- 115 お前たち、こんな愚行は止めろ。  
私はコハースベルグ<sup>(5)</sup>の百姓たちを讃える。  
百姓たちがどれほどシャツの襟を立て、  
シャツの襟に襷を作ろうと  
まだかつてこんな虱に襟を締め付けたりしなかったから、

- 120 虱を不愉快にはしなかった。  
虱たちよ、私の言うことをよく聞いてくれて、  
それでも登れないのなら、  
そこで私が考えだし、  
作ってやった竹馬を使え。
- 125 虱たちが竹馬に乗るなんて、  
びっくりもので、奇妙なものだ。  
変な策からこんなことになってしまったが、  
策は策を呼びがちなもの。  
権力を保持したいとなれば
- 130 人の子はいろいろ考え出すものだ。

## 注

- (1) この章では流行を追うお洒落阿呆を批判している。
- (2) 囚人たちの守護聖人。
- (3) X型の十字。
- (4) 旧約聖書、出エジプト記、8,13を揶揄している。聖書では虱でなくぶよになっている。
- (5) シュトラースブルクの西二時間程にある豊かな丘陵地帯。ここの民衆は昔、言葉や服装が古風だったことから、粗野で未熟な田舎者の典型として諺などになった。

第三十五章<sup>(1)</sup> 聖者の遺産のこと

大勢の人がのんきに暮らしているが、  
聖者の遺産を食い物にしているのだ。  
これがなければ、収入が少なくなって  
指も舐められないほどだ。

ああ、聖者の方々よ、気の毒に  
なんという嘲笑を浴びるのだ。  
ああ残念ながら、聖者の遺産で

なんとのんびり暮らせるのだ。

5 聖者が復讐を行うことが、

多くの所に書かれているのに、

しばしば不思議に思われるのは、

自分の財産が食い荒らされていても、

今あなた方は大変おとなしく、

10 それを誰一人として罰しようとしないうことだ。

装飾のためにあなた方に捧げられたもので、

今贅沢な暮らしをしようとする者がいる。

一度見て下さらねば、

奴らはそれを完全に食いつぶしてしまう。

15 だから、遺産を食いつぶす前に、

早く目を光らせて下さい。

ぜひすぐ来て見張って下さい。

袋の底はないも同然だ。

今貴族の身分のものは、

20 知行にする聖職録があると、

それを金のある者に売っている、

貧乏人はそれを得ようと走り回っているのに。

まいない 賂の多い者が聖職録を受ける。

そうすることは、正しいことだろうか。

25 教皇が贖宥を与えようとする時、

領主も分け前を受け取る。

分け前を渡さなければ

贖宥は停止されねばならぬ。

言ってくれ、どこにそんな権利があるのか、

30 今ボヘミアで行われているように、

敬虔な教会の財産を、

世俗の支配者が得ようとする権利が。

以前に寄進されたものが、



- 今はすべて支配者のもので、  
35 それを使って楽しく贅沢三昧、  
礼拝の方はほこりまみれ。  
国で聖地詣でが起これば、  
貴族たちは供物の分け前にあずかる。  
供物を手に入れるつもりなら、お前たちも  
40 司祭にならねばならぬ。  
兄弟団が設立されても、  
それは権力も力も持たず、  
供物が集められると、  
お前たちが分け前にあずかり、  
45 それで贅沢をする。  
お前たちが半分飲み込むとは、  
寄進者の考えなかったことだ。  
一方今は十分の一税を取る。  
それらが聖職の収入で、  
50 お前たちはそれでのんびり気分だが、  
しかしそれは教会の財産なのだ。  
教会の財を守る者よ、気をつけてくれ、  
誰一人として腐敗する者のないように、  
またこの世から去らねばならないのに、  
55 僅かな美味で来世の美味を手放さないように。  
聖者たちはあの世にいて、  
お前たちがその金を浪費してしまったのだ。  
さてみんな、もっと詰めてくれ。  
さらに大勢やって来るから  
60 沢山入れねばならぬのだ。  
羊たちが沢山小屋でおとなしくしている<sup>(2)</sup>。  
聖者たちよ、こちらへ来て  
あなた方の阿呆がどんな様子か見て下さい。

- 総大司教も、司教もすべて  
65           今は墮落してしまい、  
自分たちの教団のことを忘れ、  
          牧者からどん欲な狼になり果て、  
そればかりか教会の財産を使って、  
          全くもって皇帝の気分である。
- 70 司教が牧者のために作られたのは、  
          キリスト教徒の霊を見守り、  
牧者に大きな庇護を与え、  
          精魂込めて教え授けるためであった。  
しかし悪魔が教会という場所に、
- 75           貴族という身分を持ち込んでから、  
司教が貴族でなければ、  
          司教を持つとはしない。  
悪魔は、それをやり遂げるまでに、  
          靴を何足も履きつぶしたのだが、
- 80 領主の子供たちはすべて、  
          大喜びで司教冠をかぶろうとする。  
そこから沢山良い結果が生ずることはない。  
          というのは貴族ならしり込みするが、  
領主が教会のためにミサを歌い、
- 85           自ら説教し、教会を聖別せねばならぬからである。  
すると言う、そんなことをするのは  
          領主の仕事ではない、  
領主は司祭であってはならないと。  
          すると何によってお前は収入を得るのか。
- 90 司教区では領主たらんとし、  
          教区の外では耳を搔いているのに<sup>(3)</sup>、  
今は殿様気分を身につけている。  
          これが教会の財産に関する実状だ。

- 父親が国土と諸侯としての  
95 知行を与えることができたなら、  
司教にはしなかったし、  
司教冠をかぶせなかったであろう。  
キリスト教徒にとってそれは喜ばしいことであろう。  
お前はキリスト教徒の魂を守り、  
100 害のあるものは、すべて禁ぜねばならぬ。  
しかし思いついたことは、  
青い服の司教<sup>(4)</sup>を作ることだった、  
聖別をし、領主にふさわしいこと  
すべてを行う司教を。
- 105 恥ずかしく思うことは、家来がやることにする。  
これは現実のことだから、考えてみよう。  
いかなる物、いかなる事柄と引き替えても、  
一つの司教区に二人の司教、  
二人の牧者を、作ることはできぬのだ。
- 110 私の言うことを喜んで信じたらいい。  
それで一人は肩書きだけを持ち、  
「制服の司教」と言われる。  
その司教区は海の向こうの遠くにある。  
そこにいるのが嫌でも、  
115 そこに行こうと誓いをする。――  
しかしそれをすぐに忘れてしまう。  
これはひとえに領主であることのせいだ。  
領主には托鉢をする気はなく、教えを垂れ、  
ミサをあげ、聖別するつもりもなく、  
120 働くことをすべて避けようとする。  
それでお前は、補佐司教を作ることになるのだが、  
支払う給料は非常に悪い。  
この男は頭が良く、学識があり、

お前の職務を一人で十分にこなす。

125 お前の代わりに地獄へも行ってくれる

ハンス・リール<sup>(5)</sup>がいるならば、

恐らく様々な喜びについて語るだろう、

現世では二輪車、来世では四輪車を引く喜びを。

はい、はい、どう。ああ、私たちはみんな乗って行く。

130 私の恐れる一番悪いことは地獄に墮ちること。

#### 注

- (1) この章は教会、教団の財産を私物化する人々に対する批判である。
- (2) 原文 Vil gen der schaf in einem stal. Wander の諺辞典に Es gehen viel gedultig Schaf in einn stal. とあるが、こういう表現を踏まえた言葉であろう。
- (3) 当惑の仕草をするの意。ここでは何もすることができないことを意味している。
- (4) 青は種々の意味を表すが、古くは欺瞞、うわべを装ったり、偽っわったりすることも表した（第32章の表題には Von blaue Enten predigen とある）。ここでは偽の司教、補佐司教をおくことを意味している。
- (5) 一家の雑用を一手に引き受けて信頼されている、執事や家政婦の普通名詞として用いられる名前。自分の代わりに地獄へ行ってくれる者が必要な、司教のシュヴァンクに由来する。

### 第三十六章<sup>(1)</sup> 火をあおること

私にとっては耐えがたかったが、

火をあおるといのはうまいやり方だ。

もし近くに<sup>かんなくず</sup>鉋屑一つでもあったら、

私はとっくにあの世へ行っていたことだろう。

おやまあ、お前たち全員の阿呆を祓って利口にしてやらねばならぬとは、

お前たちはいったいどこからやって来たんだ。

お前たちがこんなに大ぜいでやって来るなんて、

そもそも誰が私の阿呆祓いのことを言ったんだ。

- 5 地位と名誉に応じてお前たちを座らせてやるための  
座布団はもうほとんどない。

私がお前たちをうまく座らせてやったら、

またこっちを見て、考えてみてくれ。

お前たちはこんなに大ぜいいるのだから、

- 10 座る場所を選んでやることなどできるはずがないのだ。

中傷者<sup>(2)</sup>がかなり大ぜいいて、

そういう連中は、ある人が気に入らないとなると、

組合の集会所で、路上で、

酒の席で、その人の名誉を売りに出す。

- 15 連中は陰に隠れて中傷し、

その人は破廉恥で、

財産を色事と賭事に費やし、

金を借りても、返却期限を守らず、

国中を欺いた、その人を知っている者は、

- 20 誰もその人と付き合いたがらないだろう<sup>(3)</sup>、と言って非難する。

連中はその人をとてもひどく中傷するので、

誰も金輪際決して

その人とかかわり合いたくないと思うほどだ。

それをしたのは悪党の意地の悪いおしゃべりで、

- 25 この悪党は、

その正直な人が決してやってなどいないことを

でっち上げ、

作り上げ<sup>(4)</sup>、捏造したのだ<sup>(5)</sup>。

それにもかかわらず、

- 30 悪党が言いふらしたことが現実に起こってしまうと、

人々はすぐに、悪党が陰で

でっち上げた悪評を信じてしまう。

というのは悪党どもはとても悪賢いので、

- 誰も嘘が見抜けないし、
- 35 連中のそういう悪事を訴えることもできないからだ。  
連中はこっそり言おうとするし<sup>(6)</sup>、  
また告解しているかのように語った。  
あの性悪男は、自分が嘘をでっち上げたということが  
明るみに出ないように、
- 40 なにもかもやったんだ、と。  
正直な人たちをひどい目にあわせる  
中傷者たちはほかにもいて、  
人の秘密や、弱みや、  
自分たちが知っていることを、匿名の手紙で言いふらし、
- 45 自分たちが知らないことはでっち上げて、  
思いつくままに紙切れに書き付け、  
筆跡や書体を変えて、  
誰が書いたかわからないようにする。  
そして誰にも見られないようにして、
- 50 町中にばらまき、  
秘密にされ、隠されていたことを  
すべて明るみに出す。  
こうして必ず、このような悪事を働いたのは  
あの正直な人に違いないということになってしまうのだ。
- 55 こういう悪党どもの阿呆祓いをしないと  
どうなるのか、みんなはよく知っている。  
私は連中をどう扱ったらいいのかわからない。  
奴らは地獄堕ちだ。  
頼みもしなかったのに、
- 60 連中は町で人を中傷した。  
みんなそろって私から離れてくれ。  
出て行け、こんちくしょう。  
私の本の中にお前たちの居場所はない。

この世では火あぶりに、あの世では地獄に墮ちるがいい。

- 65 お前たちは私にもしばしばそういうことをしたのだから、  
このお返しはきつとしてやるぞ。

#### 注

- (1) この章は悪い噂を広める人たちを批判している。
- (2) 原語は *wyn rieffer*。もとはワインの呼び売りをする人の意であったが、後に中傷する人を意味するようになった。
- (3) 原文は *Niemans koufft in, wer in kandt. kaufen* が「結婚する」の意で特に男性が妻を娶るときに用いられ、*Wer dich kennt, der kauft dich nicht.* あるいは *Wer dich nicht kennt, der kauft dich.* という諺がある。
- (4) 原文は *uß synen fingern gsogen* で、「自分の指から吸う」の意。
- (5) 原文は *uß einem holen hafem geredt* で、「空の壺から語る」の意。
- (6) 原文は *under der rosen sagen* で「バラの下で言う」の意。バラは「沈黙」と「秘密」の象徴。

### 第三十七章<sup>(1)</sup> 馬の糞<sup>(2)</sup>が泳ぐこと

馬の糞が泳いで来た。

そこで何処から来たのかと問うてみた。

馬糞の申すに、我々林檎は到着したばかり、

シュトラースブルクから泳いで来たとの事だった。

私には馬糞のことが奇妙に思えて堪らない。

どうして馬糞が林檎といっしょに来たのだろう。

自分も林檎なのだと言い張って、

林檎といっしょにラインの河を泳いで来たが、

- 5 馬糞の身分を捨てたとて

所詮は馬から放<sup>ひ</sup>り出されたものなのだ。

身内はすべてが百姓なれど、

多くの者が貴族のように振舞いたくて、

貴族に伍して行けるよう、

- 10           そして馬糞ながらも林檎ともども泳いでゆけるよう、  
おのれの娘を貴族の許に嫁がせる。  
              これで、自分はもはや平民じゃあない、  
林檎の身分になったのだぞと、馬の糞は考える。  
              貴族の息子に娘を貰ってもらい、
- 15  自分も貴族の席に列するには、  
              多額の金を出さねばならぬ。  
もしそのお金が出せぬなら、  
              百姓なぞは見向きもされぬ。  
貴族は落ち目になってから、
- 20           町方娘を娶るようになってきた。  
そこで大馬鹿者の百姓は、  
              以前に変わらず自分は馬の糞なのに、  
ほかの林檎と一緒に泳いでゆけると考える。  
              祖先いらい受け継いだ
- 25  おのれの本分を守っていれば、  
              <sup>いずこ</sup>何処にてもあれ、より良い暮らしがあるものを、  
貴族の暮らしを見るにつけ、  
              おのれの女房、子供らも  
同じ暮らしが出来ようものを、と考える。
- 30           だがこの世はとかく俣ならぬ。  
市民たちの女房は、絹、ビロードをあしらった  
              美々しい衣裳や金鎖、  
真珠の飾帯などを身に纏い  
              まるで貴族のような<sup>いでたち</sup>服装だ。
- 35  そこで身の回りの物すべてを、  
              黄金造りにしようと百姓づれが思いつく。  
かく貴族のように振舞って、  
              馬糞は林檎になりたがる。  
他の林檎ともども泳ぎ来たったあの者も、



- 40 名前は「馬糞の君」なのだ。  
 だが貴族は逆のことをするもので、  
 粗末な衣裳を着たがるのだ。  
 すなわち、野良着やら作業着を  
 絹物の代わりに着込んだ有様は、
- 45 まるで匹夫ひつぷに見紛ふうていう風態で、  
 林檎は馬糞になりたがる。  
 司祭もおのれの身分に飽き足らず、  
 まるで貴族同様に  
 戦さ紛いの騒ぎを起こし
- 50 鷹狩り、鳥追い、待ち伏せ獵と、  
 好んで獵師の角笛を持ち歩く。  
 だがそれも長くは続かない。  
 みなその地位を失うのみか、  
 生まれながらに継承した
- 55 その分限にも留まらず、さらには父祖が手に入れた  
 地位もわが手に残らない。  
 かの皇帝はご宸筆しんぴつを下されて、  
 貴族の席に列せしめてくださったが、  
 鎧も盾も皇帝から金で買った品だった。
- 60 そ奴の血筋が知りたくば  
 鋤取るそ奴の父を訪うが良い、  
 阿呆の浅知恵、願ねがい下げにして欲しい。  
 馬の下に潜り込んだ雄鷄も  
 自分を大物だなどと錯覚し、
- 65 威丈高に闊歩して  
 「他人を踏まぬようにせよ」と言っていた。

## 注

- (1) 自分の身分を辨えず、高望みをして他の身分の高い者を真似る人々を戒める

章である。

(2) この章では、身分の低い者を馬糞に喩え、貴族を林檎に喩えている。

### 第三十八章<sup>(1)</sup> 祭壇に卵を見つけること

わしはカレンベルク<sup>(2)</sup>の司祭だ。

わしはやることなすことインチキで

祭壇に卵を見つけたら

大いなる恩寵<sup>の</sup>を宣べ伝えることにしておく<sup>(3)</sup>。

我らが司祭が聖職祿を得ようとして

どんなことをやったか、

どうやって相手をペテンにかけたか、聞いてくれ。

さて司祭は農民たちに自分の金を渡しておいて、

5 その金を献金として出させ、

そのやり口で相手の司祭からその聖職祿をだまし取ったのだ。

司祭の言うところではここの農民は

心がけが良くて、献金をしたがるというのだが、

それは仕組まれた事だった<sup>(4)</sup>。

10 さてまた司祭が祭壇の上に卵を

一つか二つでも見つければ

教会開基祭が催せる。

料理女から、亜麻と

六十グラム<sup>(5)</sup>ほどの蠟<sup>ろう</sup>と

15 シャツと、それに糸巻棒を受け取り、

小麦、穀物をそのあたりにふりまく。

これら全てを司祭は棒にかけると

農民の心を和らげるために

讃歌を歌い始める。

20 こうして司祭はこの場所で起こった

大いなる奇跡について語るのだ。

来たときは目が見えなかったのに

見えるようになって帰っていった人がいる、と。

今や彼方此方の国々へ

25 人々が聖アンナ<sup>⑥</sup>のもとへお参りに行き

多くの教会が建てられた。

人々は新しい教会へ巡礼し

古びた教会は朽ちるにまかせている。

当然訪れるべき教会を

30 ごみくずとなるにまかせている。

これらの教会はやがて人の口にのぼることもなくなり

廃墟となるにまかされる。

こうして、それは神の御前の飾りどころか

ただの物笑いの種になる。

35 近くの聖者は奇跡を起こさないのだとか。

そこで人々は特に遠くの聖者ばかりを求めるが、

足が疲れるだけのことだ。

出て行くときにも阿呆なら、戻ってきても馬鹿のまま。

あれこれやっても、とどのつまりは

40 司祭ひとりが太るだけ。

そこで司祭は助任司祭にこう語る。

「ゆっくりうんと上手に歌ってくれ。

全ての者が献金するまで

節<sup>ふし</sup>を長く引き延ばせ。

45 皆が献金を終わったら

すぐにすばやくすみやかに歌ってしまえ。

連中が我々に献金をしようとししないのに

なんのためにゆっくり歌うんだ。」

私がしかと聞いたところでは、献金してくれないときには

50 神に曲を献じたりはしないものだ、ということだ。

農民たちが恥ずかしがって  
 誰も最初に献金しに行こうとしないと  
 我が司祭はすぐにそこへ行って  
 一文ばかり御献金と相成る。

- 55 まるで我々が阿呆で  
 奴が何を望んでいるのか気がつかないとでもいうように。  
 司祭が献金しに行くのは  
 それが呼水となるからだ。  
 教会開基祭での献金の際の讃歌が
- 60 司祭にとって短ければ  
 男も女も回りにやって来て  
 皆が自分の頸垂帯に<sup>ストラ</sup>(7)口付けするまで  
 もう一度讃歌を最初から始めるのだ。  
 献金と卵をむさぼった
- 65 欲深<sup>よくふか</sup>司祭がやったのはこういうこと。  
 草に中<sup>あた</sup>る犬のごとく神が司祭をよろしく嘉<sup>よみ</sup>し給わんことを<sup>(8)</sup>。

#### 注

- (1) この章は聖職者の欲深さを批判したものである。
- (2) よく知られたカーレンベルク (Kalenberg) ではなくカレンベルク (Kallenberg) となっているのは「おしゃべりをする、叫ぶ」の意味の動詞 kallen にかけたものであるという。本作品第十九章百二十八行を参照。また注4を参照。
- (3) 『ペーター・ロイ』の物語に同僚の司祭がパンを焼かせ、こっそり祭壇に置かせておいたのをミサの際にペーター・ロイが見つめ、集まった農民たちに、これは神から自分への贈物だと言い立てる話がある。
- (4) 『カーレンベルクの司祭』の物語に主人公が自分の教区の農民達に予め高額貨幣を渡し、それを献金するように指示しておき、他教区の司祭にそれを見せ、実入りの良い教区だと思わせて、まんまと教区を交換してしまう話がある。
- (5) 原文は ein halben vierling。vierling=4分の1ポンド、1ポンド=2分の1キロ。つまり1キロの16分の1、即ち62.5グラムとなる。
- (6) 聖母マリアの母。当時その崇拜が盛んであった。
- (7) ストラは司祭などが首に掛け、体の前に垂らす約2.5m程の祭服用の帯状の

もの。

- (8) 犬が草を食べると中ると一般に信じられていた。本作品第十八章六十六行を参照。

### 第三十九章<sup>(1)</sup> ふしだらな行ないをすること<sup>(2)</sup>

私はふしだらな行ないをするために  
ここ阿呆の舞踏会に加わっている。  
天国に行こうが、地獄に落ちようが、  
私は他の阿呆たちと行動をともにする。

「阿呆祓いさん、やめてちょうだい。

私たちは世俗の人間じゃないんだから、  
あなたは私たちを阿呆扱いしないで、  
好きなようにさせてくれたらよかったのよ。

- 5 この本を書いて、ここで私たちを  
公然と辱めるのはやめてくれませんか。

あなたはマリアに目を向け、  
彼女に免じて私たちを大目に見るべきだわ。」

今さらお前たちは何と清純ぶって

- 10 阿呆の仲間に入れられるのを恥じていることか。  
かてて加えてお前たちは私に対して怒った態度をとっている、  
まるで私がお前たち修道女を阿呆祓いの場に  
呼び出したのは不当だと言わんばかりだ。

私はお前たちを蒸し風呂へ連れていこう<sup>(3)</sup>、

- 15 自分で蒸し風呂のいすにすわりなさい。  
もしお前たちの誰からも阿呆の汗が出てこなかったら、  
そのときは私を訴えて、

女子修道院長に話すがいい、  
私のわざが証明されておらず、

- 20 不当にここへ連れてこられたとな。  
私が以前かかえていた阿呆の一人も、  
自分だけは賢いと言っていたが、  
あまりにも多くの阿呆でいっぱい、  
数え切れないほどだった。
- 25 脅し文句なんか気にするもんか。  
たとえお前たちがもっと不愉快になるとしても、  
お前たちは私の話を聞くべきだ。  
マリアさまに免じて勘弁してほしいだつて。  
それが本当に妥当なことならばいいが。
- 30 しかしお前たちが今ここへ来たからには、  
私に何ができるか、見てみよう、  
そのような長旅が  
むだにならないためにも。  
我慢しなさい。まもなくお前たちにとって事態はよくなる。
- 35 マリアさまは神殿に運ばれた、  
マリアさまはもはや俗世のことは考えなかった。  
マリアさまは若かったが、それでもまっすぐ前へ進み、  
はしたなく後ろを振り返るようなことはなかった。  
というのも、鋤に手をかけながら<sup>(4)</sup>
- 40 自分の教団のためになることをせず、  
悪い態度で後ろを振り向く人は、  
神にふさわしいものとはなれず、  
神の国を去る、  
キリスト自らお前に教えているように。
- 45 この話に熱心に目を向け、  
修道院という共同体でいかに生活するかを、  
処女マリアから学んだ女性は  
今やまったく少ない。  
今、自分の娘を嫁がせることができず、

- 50 娘に与える金もない  
貴族がいれば、  
その娘は修道女の生活をしなければならない。  
娘が修道院で神に仕えたがっているからではない。  
それはただ、貴族がよくするように、
- 55 貴族が娘を自分の意図、自分の高慢な考えに従って、  
娘に財産をつけてやるためである。  
その後、娘が成長し、  
女であることを自覚して、  
阿呆が娘をむずがゆくさせ始めると、
- 60 娘は春を売りまくり、  
自分に夫を世話してくれなかったと、  
草葉の陰の父親をののしり、  
早朝ミサへ行くよりは、  
貧しい男でもいいから欲しいと言う。
- 65 こうして娘がふしだらな行ないを始めたら、  
すべておしまいだ。  
「それはよくない、こうすることでお前は  
自分のりっぱな一族を辱めているのだ」と人が言うと、  
娘はすかさず答える。
- 70 「私が400人の子を産もうと思ったのは、  
ひとえに私の一族を苦しめるためよ。  
なぜ私の一族は私に無理やりこんな教団の服を着せたの。  
私の一族に恥をかかせてやるために  
私が今考え出せることを
- 75 実行するわ。さあさあ  
徹底的にやるわ<sup>(5)</sup>。  
私が修道女になって  
この教団にやってきたのは、  
修道女であれば当然しなければならないように、

- 80 私の教団規則を守るためではない。  
 私が修道服を着たのは、  
 父が貴族にふさわしく、  
 私に夫をあてがってくれないから。  
 だから私はここで私が入っている教団で
- 85 修道女になったのよ。」  
 若いにせよ、年ごろにせよ、老いてるにせよ、  
 いちばん多く子供を作った女が  
 ここでは女子修道院長として尊敬される。  
 だから私は貴族に警告する、
- 90 もし死んだ後にののしられたくなければ、  
 我が子をその意志に反して  
 無理やり修道院に送るべきではない。  
 女が修道院に入りながら、神の名誉も、世俗の名誉も  
 学ばないよりは、
- 95 どんな夫を見つけるにせよ、  
 多くの子供をもうけるほうがずっといい。  
 今や女子修道院はみな  
 貴族たちみんなの養護施設となっている。

## 注

- (1) この章はふしだらな修道女に対する批判である。
- (2) 表題の原文は den arß in die schantz schlahen。ふしだらなことをするの意。
- (3) 蒸し風呂へ連れていく＝こらしめる。
- (4) 新約聖書、ルカによる福音書、9, 62 参照。
- (5) 原文は Das leder muß gegerbet syn! 皮をなめす＝同衾する。